

インド・ビハール州立

四研究所の現状 (一)

——ミティラ研究所、ジャヤスワール

研究所、ヴァイシヤリ研究所——

長崎法潤

二、ミティラ研究所

ガンジス河の北部に位置する現在の Darbhanga は、かつて Mithila と呼ばれ、十三世紀に Gangeśa Upādhyāya が創設した新ニヤーヤ学派 (Navyanyāya) が栄え、多くの優れた論理学者が輩出している。この輝かしい学問の歴史を誇る Darbhanga に、一九五一年一月、ビハール政府がサンストリット研究のためにミティラ研究所 (Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning) あるいは Mithila Institute) を設立した。この研究所の目的は、深い学識を持つ伝統的なサンストリット学者すなわちペンディットと近代的な学問研究を身につけたサンストリット学者との meeting ground を作り、お互いに学識を交換しながらサンストリット研究を行なうことである。

初代所長として Dr. Umesh Mishra が任命され、一九五四

年退官した。その後有名なインド学者 Dr. P. L. Vaidya が所長として迎えられ、彼の在職中 Buddhist Sanskrit Texts などの出版等数多くの業績を残した。一九五九年、Dr. J. Mishra がその後を継ぎ、一九六二年以後 Dr. S. Bagchi が所長として活躍している。

研究所は Muzaffarpur に在るゴハール大学 (The University of Bihar) に附属し、ディプロマとかサンストリットの M. A. とか Ph. D. のディグリーはそのより授与される。現在のところ研究所では M. A. ノード (a) Sāhitya, (b) Vedānta, (c) Nyāya-Vaiśeṣika, (d) Mīmāṃsā, (e) Śaṅkhyā-Yoga の講義が開かれ、近い将来にヴェーダ文学とヒンドラフィの講義も加えられることになっている。

次に研究所におけるスタッフの研究成果について紹介しよう。現所長 Dr. S. Bagchi は前ナランダ研究所長 Dr. S. Mookerjee の弟子であり、カルカッタ大学に提出したインド論理学に関する博士 (D. Litt.) 論文の出版 "Inductive Reasoning, A Study of Tarka and its Role in Indian Logic, (1953)" が、Prof. S. J. Jha は Ratnakōśamata-vādārtha を校訂し、現在出版途上である。シャイナ学者 Dr. G. C. Chandra はかつてナランダ研究所の講師であったが、その後ヴァイシヤリ研究所に移り、さらに昨年当研究所に赴任してきた。現在彼は K. P. Jayaswal 研究所所蔵のマニエスタリン 4 Tarkarāhasya 4 Vādarāhasya 2 の校訂に忙しむ。Dr. B. S. Agnihotri は Bhagavadgītā の注釈を書きついでる。Dr.

らうであらう。Prof. M. L. Goswami は最近、ペンハール大学に提出せる博士 (D. Litt.) 論文 "A Critical and Comparative Study of the Vivarāna with special reference to Bhāmati" を完成し、Nyāyakusumanājālī を三注釈 (the Bodhani of Varadarāja, the Āmoda of Śaṅkara Miśra, the Viveka of Guṇananda) とする校訂しつゝ、Prof. Babu Mishra はペンハール大学に博士 (D. Litt.) 論文を提出するために正理学派の比重について研究している。そのかたわら研究所のために Sulocanānādhavacampū を校訂している。フランス出身の佛教僧 Bhikṣu Āryadeva は英語、ドイツ語、フランス語を教えつゝ、その他 Traditional Pandit ヲルべ、Pandit Mahesh Jha, Pandit Murlidhar Thakur, Pandit Sadanand Jha, Pandit Badrinath Jha などが伝統的な仕方でも鍛えられたサンスクリットの学識をもち、研究に協力している。

Udayana の完全な三つのマニエスクリプト Nyāyavārtika-tatparvaparīśuddhi など研究所は六千以上のマニエスクリプトを蔵することに誇を持っている。それほど多くのマニエスクリプトを持つ大学や研究所はペンハール州では見出されなうが、他と比較すればあまり自慢にならない。それらのマニエスクリプトあるいは他の大学や個人所蔵のマニエスクリプトを底本にして研究所は数多くの校訂出版をなしている。さらにこの研究所の出版として忘れてならないのは大乘経典のテキスト (Buddhist Sanskrit Texts) の校訂出版である。これは佛誕二五〇〇年記念の事業として大乘経典二五巻を出版することになり、

中央政府とペンハール政府との両者から出版費が支給されている。第二代所長 Dr. P. L. Vaidya がこの校訂出版の General Editor となつて、一九六二年の終までに全巻の出版を完了する予定であったが、彼は一九六三年九月までに一二巻出版しただけで、Dr. S. Bagchi に残りの出版を委託した。これらの校訂出版はほとんどすべてに出版されたテキストのリプリントにすぎないが、中には初めて出版されるテキストも若干含まれている。それらについて説明する前に研究所の出版リストを載せる方が読者にとって都合かと思つて。

A. Ancient works

1. Tattvacintāmaṇi of Gaṅgeśa with Āloka and Darpaṇa Vol. I.
2. Kāvya-parīkṣā of Śrīvatsalāhchana.
3. Pārījāta-haraṇa of Kaṇnapūra.
4. Kāvya-lakṣaṇa ratnaśrī-Com. on Kāvya-darśa of Daṇḍin by Ratnaśrījñāna of Ceylon.
5. Vaiśeṣika-darśana with an anon. com.
6. Abhijñānaśakuntalam of Kālidāsa with com. by Śaṅkara and Narahari.
7. Āgama-dambāra, a drama by Jayantabhaṭṭa.
8. Līlavatī of Bhāskara-cārya with com. by Dāmodara Miśra.
9. Mantrakaumudī of Devanātha Thakura.

10. Padārthīyadivyaśaṣṭu of Umāpati.
11. Rasatarāṅgīnī of Rāmānanda Ṭhakkura.
12. Alankāramañjarī of Venīdatta.
13. Lakṣaṇamālā of Udayana with com. by Śaśinātha.
14. Lakṣaṇāvalī of Udayana with com. by Keśavabhāṭṭa.
15. Śabdaraṭnākara.
16. Saugatasaṭtravvākyāṅkārīkā.

B. Modern works

1. Rāmāvatāratraprakṛṭṭa prabandhāvalī (Miscellaneous) Vol. 1.
2. Tritalāvaacochedakakāṭāvāda of Śaśinātha (Navya Nyāya).
3. Liṅgavacanana-vicāra of Dinabandhu (Vyākaraṇa).
4. Vimaṅḍalavakravvicāra of Dayānātha (Jyotiṣa).

C. Studies in English

1. History of Mithilā by Dr. Upendra Thakur.
2. History of Navya Nyāya in Mithilā by Prof. Dinesh Chandra Bhattacharya.
3. Vācaspati Miśra on Advaita Vedānta by Dr. S. S. Hasurkar.

D. Mahāyāna Sanskrit Text.

1. Lalitavistaraḥ.
2. Samādhirañjāsūtram.

3. Lanākāvātārasūtram.
4. Aṣṭasāhasrikā prajñāpāramitā śloka-vyākhyāśaṣṭitā.
5. Gaṇḍavyūhasūtram.
6. Saddharmapuṅḍarīkasūtram.
7. Daśabhūmikasūtram. ×
8. Suvarṇaprabhāṣasūtram. ×
9. Tathāgatagūlyakam.
10. Madhyamakaśāstram nāgārjunīyam, ācāryacandrakīrti-vīracitayā prasanna-padākyavyākhyayā samvālitaṃ.
11. Śiṣṭasamuccayah śāntidevavīracitah.
12. Bodhicaryāvatārah śāntidevavīracitah prajñākarama-tivīracitayā paṇḍikākyavyākhyayā samvālitaḥ.
13. Sūtrāṅkārāḥ ācāryāśaṅgavīracitāḥ. ×
- 14~15. Mahāvastu—lokkataravādināḥ vinayaḥ. ×
16. Mūlasarvāstivādināḥ vinayaḥ. (Gilt Mss.) ×
17. Mahāyānasūtrasaṅgrahaḥ Part I—Suvikrāntavikrā-mīprajñāpāramitā, Vajracchedikā, Śeṣṭstambasūtram, Su-klhāvativyūhaḥ, Kāraṇḍavyūhaḥ, Pratiṭyasamutpādasū-tram, Bhaiṣajyaguruvaidūryaprabhāṣasūtram, Rāṣṭrapāla-pariprocchā, etc.
18. Mahāyānasūtrasaṅgrahaḥ Part II—Āryamañjuśrīmū-lakalpah.
19. Avadānaśātakam.
20. Divyāvadānam.

21. Jātakamālā (Bodhisattvāvadānamālā) subhāṣitaratna-karaṇḍakakathā ca āryaśūtravracitā.

22~23. Avadānakalpalatā ksemendravracitā.

24. Mahāyānasotrasaṅgrahaḥ.

25. Aśvagosagrathā—buddhacaritam, saundaranandam.

× (×印は未出版)

Buddhist Sanskrit Texts のエディションは、前に記したように、そのほとんどはすでに出版されたテキストを底本として校訂されているが、なかには注意に値するものもある。次にそれらについて若干の注意を払いたい。

Gandavyūhasūtra のエディションは主として鈴木・泉本によっているが、やはり Baroda の Oriental Institute 所蔵の新しいマニエスタクリプト (Newari 文字) を参照し、鈴木・泉本の脱漏が補われている。このことにつき、長谷岡一也氏がすでに紹介している (印度学佛教学研究第十三卷第一号三九二頁)。

Jātakamālā (No. 21) の Appendix 2 Jātakamālā の Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā (pp. 275~304) がカネカッタ大尊の Dr. A. C. Banerjee によって初めて校訂出版されている。このマニエスタクリプトは Newari 文字で書かれ、ネパールの Nepal Durbar Library に蔵されている。Arya Sūtra の Jātakamālā と比較して、原作者の Subhāṣitaratnakaraṇḍakakathā は文体が劣り、同一作者の作品とは考えられな

い。Nāgārjuna が二人存在したように、この場合も Arya Sūtra という同名の二人の作者があり、この書の作者は Jātakamālā の作者 Arya Sūtra とは異なる別の Arya Sūtra に違ふように、その序文に記している。

右に記したリストが示すように、Mahāyānasūtrasaṅgraha Part I (No. 17) は多くの短かい經典を集めたものであり、そのうちに数々の興味深い經典も含まれている。まず第二二として Rātraguṇasamcaṣṭhā があつた。このエディションは Dr. P. L. Vaidya が Oriental Institute (Baroda) のマニエスタクリプトをもとにエディションを作り、それを Obermiller の edition (Bibliotheca Buddhica, 1937) で訂正したものである。第九 Madhyamaka-Sālistamba-Sūtra (pp. 107~116) はブリー大尊の V. V. Gokhale 博士によつて校訂され、梵文マニエスタクリプトからの校訂出版がこれが初めてである。ローカー博士がチベットのラッサに滞在中(1948~50)この梵文マニエスタクリプトをラッサの Kundeling 僧院で発見し、書写した。Louis de La Vallée Poussin の撰梵 (Théorie des douze Causes 1913, pp. 68-108) の中の若干の部分に符合している。次に第一九 Arhaviṃścayasūtra (pp. 309~328) は Dr. P. L. Vaidya が Oriental Institute (Baroda) のマニエスタクリプトをもとに校訂している。このマニエスタクリプトはカトマンプの Bir Library 所蔵の Newari 文字のマニエスタクリプトから Devanāgarī 文字に書写されたものである。この断片ではあるがこのエディションがすべて Alfonso Ferrari

によつて Reale Accademia d'Italia (1944) に発表されている。さらに K. P. Jayaswal Institute にもこのマニェスクリプトが蔵され、マナレンス・ヒンズー大学の N. H. Santani がそれを校訂したと Dr. P. L. Vaidya が序文に報告している。以上ミテイヤ研究所のスタッフ及び出版活動について概説を試みたが Buddhist Sanskrit Texts の出版は予定よりかなり遅れているために完成を急いでいる。近く出版予定のうちにも貴重なエディションが含まれている。また研究所の方は新しい建物が完成し、学生の数も年々増加し、発展していることは喜ばしい。

三、ジャヤスワール研究所

ビハール政府は、優れた歴史学者故 Dr. K. P. Jayaswal の業績を永く記憶にとどめるために一九五〇年に K. P. Jayaswal Research Institute をパトナに設立した。パトナ博物館ビルディングの北の一翼が研究所のために当てられている。この研究所の目的はインド史、考古学、インド古代文化をその original source をもとに研究することである。

有名な歴史学者 Dr. A. S. Altekar が初代所長として活躍していたが、急死したので、Dr. K. K. Datta が第二代所長に就任した。一九六二年ガヤにマカダ大学が創設されるやいなや彼は学長になり、パトナを去った。その後パトナ大学の Prof. S. H. Askari が Honorary Joint Director すなわち所長代理を勤めており、所長のポストは現在もあつてゐる。

初代所長アルテル博士について少し附言すれば、わが国の佛教学者の中で博士に接した思い出を持つ人はかなり多い。Kumrhar 発掘報告など多くの論文や研究書を発表しているが、たとへば "Biography of Dharmasvamin" の序論 (Introduction of the General Editor) を見るだけで歴史学者としての彼の偉大さを知ることが出来る。

研究所は、故 Rāhula Sāhityāyana がチベットから将来した佛敎のマニェスクリプトを蔵することでも知られている。それらのほとんどが今まで出版されなかったものない貴重な大乘経典や論書のマニェスクリプトであり、アルテル博士の在職中佛敎学者に校訂するように割当つた。それらのうち校訂の完成したのから Tibetan Sanskrit Series として研究所が出版している。また長尾雅人博士校訂の Madhyāntavibhāga-dhāya (Suzuki Research Foundation, 1964) の "C" の Series としてではなく出版されたものもある。

Tibetan-Sanskrit Series としつゝこれまで出版されたものを次に紹介しよう。

1. Pramānavārtikabhāṣya of Prajñākaragupta, deciphered and edited by Tripitakechārya Rāhula Sāhityāyana Part I : text pp. 648+38, Part II : English Indices to the above, pp. 44.
2. Dharmottarapradīpa (with Nyāyabindu, Nyāyabindutīkā and Dharmottarapradīpa) edited by Pandit Dalsukhbhai Malvani, pp. 301+95,

3. Ratnakirtinibandhāvālī of Ratnakṛiti, deciphered and edited by Prof. A. L. Thakur, pp. 166+29.
 4. Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti, edited by P. S. Jaini, pp. 499+144+XII.
 5. Jñānaśrīmītrānibandhāvālī of Jñānaśrīmītra, deciphered and edited by Prof. A. L. Thakur pp. 644+67+10.
 6. Upaśampadāḥkapitī, deciphered and edited by Dr. B. Jinananda, pp. 27+6+7.
- 右に於いて明らかなるに、1, 2, 3, 5は佛敎論理學に關するテキストである。そのうち3, 5は法稱以後の論理學者による重要な論理學書である。第四の Abhidharmadīpaとその注釈 Vibhāṣāprabhā については核部助教教授が詳しく紹介してゐる(大谷學報第四一巻第二号九四頁以下)。
- この研究所は、前に記したように歴史とか考古學の研究をその目的としており、それらに關する資料とか發掘報告などを左に示すやうに Historical Research Series として出版してゐる。
1. Biography of Kunwar Singh and Amar Singh, by Dr. K. K. Datta, pp. 234+XII.
 2. Biography of Dharmasvāmin (Chag lo-tsa-ba Chos-ri-dpal), A Tibetan monk pilgrim, translated from Tibetan into English by G. Roerich, with a historical introduction by Dr. A. S. Altekar, pp. 144+45.
 3. Kumrāhar Excavations 1951-55 by A. S. Altekar and

- Shri V. Mishra, with 39 figures and 100 plates pp. 141.
4. Antiquarian Remains in Bihar by Dr. D. R. Patil.
 5. Karian Excavation Report by Dr. S. R. Roy.

この中の "Biography of Dharmasvāmin" となつてゐる Dharmaśvāmin の伝記はわれわれにとって非常に興味深い。彼は一二三四年から六年にかけてインドのムダガヤとかナールンダに滞在し、彼の目撃したことを體驗を Upaśaka Chos-dar と口授筆記させた。それをもとにして後者は Dharmasvāmin の伝記を書きあげた。このテキストクリプトは Rāhula Sāṅkṛtyāyana によつてテキストで發見され、その複写が持ち帰られ、Bihar Research Society のライブラリーの所蔵となつてゐる。それをロシア出身の有名なテキスト學者故 Dr. G. Roerich がテキスト語のテキストを校訂するとともに英訳をなしたのがこの書である。玄奘等支那の學僧が残した記録はインド佛敎史を明確にするために貴重な資料を提供していることについてわれわれの知るところである。しかし佛敎の末期について語るところの資料を今までわれわれは知らなかつた。回教徒の侵入に悩まされ、佛敎の末期を見た Dharmasvāmin の體驗は初めて佛敎の最後の状況を教える貴重な資料である。

最後に研究所のスタッフについて附言しておこう。現在歴史、考古學關係の Research Fellow が五人、梵文テキストクリプトを整理するために二人のペンディットがいる。ここでは講義はなされてゐない。

四、ヴァイシャリ研究所

ビハール州の首都バトナ市からガンジス河を連絡船で渡り、数時間汽車に揺られると Muzaffarpur 市に着く。そこから一時間半ほど田舎道をバスが走るとジャイナ教祖マハーヴィーラの生誕地ヴァイシャリ村に着く。ビハール政府は一九五五年四月にジャイナ教及びブラクリットの研究所として Vaisali Institute を設立した。しばらく研究所は仮に Muzaffarpur 市に置かれていたが、一九六五年四月にヴァイシャリに研究所の建物が竣工したのでそこに移った。

初代所長として Dr. H. L. Jain が就任した。彼には, Satkhandāgama (ディガンバラ・ジャイナ・テキスト) とそのヒンディー訳の出版, Sudāmsanacarin (アパプッランシャ・テキスト) とそのヒンディー訳の出版などがある。一九六一年彼が退官し, Dr. Nathmal Taria が所長として迎えられた。以前彼はナールンダ研究所の教授であり、彼の業績についてナールンダ研究所現況報告のところで記しておいた。彼は昨年八月末アメリカに行く途中わが国に立ち寄っている。

この研究所の学生の数も少ないが、ティーチング・スタッフは所長のほかに Prof. Anantatal Thakur と英語の講師 R. P. Poddar との二人という淋しきものである。Prof. A. Thakur は昨年春ミティラ研究所から赴任して来て、実際はジャイナ教学者ではないが、ブラクリットを教えている。彼は K. P. Jayaswal Institute からすでに紹介した佛教論理学書 Ratnakirtimban-

dhāvati じ Jānāśrimitranibandhāvati との校訂出版を出しているが、近頃あまり佛教に対して興味を示していない。また彼はミティラ研究所から Saugatasūtravākyānkarikā の H. D. 版を出版し、最近 Nyāyacaṭuṅgrāntihkā (Nyāyabhāṣya, Nyāyavārtika, Tāparyavārtikā, Paśisūddhi) の校訂を終った。なかなか真面目な学者であり、最近ヴァイシャリカの研究に力を注いでいる。

当研究所からの出版物はまだ数少ない。J. C. Sikdar の博士論文 “Studies in the Bhagavatsūtra” じ N. C. Shastri の博士論文 “Haribhadra ke Prakrit Kathasāhitya ka ālocanātmak Adhyayana” との二書が出版されただけである。これらの博士 (Ph. D.) 論文はこの研究所において完成され、ビハール大学に提出されたもので、後者はヒンディーで書かれている。ヒンディーの論文に関連して述べれば、ヒンディーで書いた博士論文を大学が受付けるようになったのは筆者の滞印中のことである。それ以後ヒンディーで書かれた論文や書物が急に多くなった。ことに田舎の大学生などにはその傾向が強く、英語を通して開かれた窓が閉ざされつつあることは残念である。

マハーヴィーラ生誕地、ヴァイシャリはジャイナ教徒にとって最も重要な巡礼地であるが、現在ジャイナ教徒は西インドに集中している関係上、ジャイナ教を学ぶ学生はヴァイシャリにあまり集まらない。新しい研究所と学生寮が昨年完成し、ジャイナ教に関するかぎり良いライブラリーを持っているから、静かにジャイナ教を学ぶには良いところである。〔完〕